

中国人日本語学習者の対のある自他動詞の使用状況
—中間言語から見る中国人学習者の問題点の解明を目指して—

そんほうへい
孫芳兵・筑波大学大学院

本研究では、学習者が有対自他動詞を使用する時に、用いていると思われる独自の文法規則に焦点を当てる。自他動詞が使われている場面を動画で提示し、学習者がどのように場面を理解し、表現するのかを調査し、分析する。学習者の独自のルールを解明することを目的とする。解明した独自のルールを今回の発表で皆様とシェアしたい。

1. 研究背景と目的

対のある自他動詞の混用は、中国人学習者の初級レベルのみならず中上級レベルとなった後も続くと言われている。小林(1996:42)は「中国人学習者の母語で両用動詞であるものを、日本語では区別して使用しなければならないというのは大変なことであろう。加えて、同じ状況を自動詞でも、他動詞でも表現でき、しかも、コンテキストによって、いずれか一方が不適切となるわけである。困難さが想像できよう」と指摘している。そこで、本研究では、学習者が有対自他動詞を使用する時に、用いていると思われる独自の文法規則に焦点を当てる。自他動詞が使われている場面を動画で提示し、学習者がどのように場面を理解し、表現するのかを調査し、分析する。学習者の独自のルールを解明することを目的とする。

2. 先行研究

杉村(2013a)及び杉村(2013b)により、(非人為)無情物の非意図的な作用による対象の変化、(非人為)被害や迷惑の意味、(人為)行為の結果に焦点を与える対象の状態(動作主特定)、(人為)行為の結果に焦点を当てる対象の変化、(人為)行為の結果に焦点を当てる動作主の変化、(人為)行為の結果に焦点を当てる被害や迷惑の意味という6つ場合では、中国語母語話者と日本語母語話者の対のある自他動詞への選択傾向には大きな差がある。ここで問題となるのは同じ対象の変化の場合でも、学習者が使い分けの容易な場合と容易に使い分けが理解できない場合がある。それ故、場面の中で、人為的事態か否か、動作主が特定の否か、話し手の関心が行為にあるか結果にあるか、意図性が認識されやすいか否かが自他動詞の選択に大きな関わりがあることがわかった。そこで、本研究では、その結果を踏まえて、学習者が対のある自他動詞を使用する際に、どのような発想で使い分けようとしているのかを探っていく。

3. 調査の実施

調査期間：2017年6月から7月

調査対象：日本におけるT大学で学んでいる中国人留学生、計10名である。レベルは中級、または上級である。

調査方法：ビデオを見る前に、自動詞か他動詞を使って口頭で教えてください、と指示を出す。

学習者にビデオを見せ、答えてもらう。学習者の回答を録音する。(調査に使うビデオは日本の日常生活を想定した場面で自他動詞の使用を確認できるものを選び、調査用に数秒間の動画としてまとめたものである。)

ビデオの例：肉を焼いている。ひっくり返したら肉の色が変わった。その時ナレーションが「あー、肉_____。」と流れる。

③フォローアップインタビューを行う。

4. 結果

表1 ビデオ調査の結果

単語	設定した場面	回答
割れる	①(鉄を叩いて)割れました。	割れる(20%)、割る(40%)、折れる(20%)、その他(20%)
ぶつか る	②車はゆっくりと前進し、前のバイクにぶ つかり、事故となった。	ぶつかる(80%)、ぶつける(10%)、その他 (10%)
ぶつけ る	③学生を押さえつけ、走行中のバイクをぶ つけて怪我をさせた。	ぶつける(20%)、ぶつかる(30%)、ぶつけ られる(40%)、その他(10%)
変わる	④おもちゃを触ったら、色が変わった。	変わる(60%)、変える(40%)
焼ける	⑤(焼肉を焼いている)あー、肉が焼けて る。	焼ける(0%)、焦げる(30%)、溶ける (10%)、焼く(50%)、その他(10%)
起きる	⑥(現場の様子を写している)どのように して事故は起きたのか。	起きる(10%)、起こる(70%)、発生する (20%)
起こす	⑦(人が運転している)追突事故を起こし た。	起こす(0%)、遭う(30%)、起こる(60%)、 起きる(10%)
動かす	⑧(車椅子を試している)このように僅か な力で動かすことができます。	動かす(60%)、進める(20%)、前進する (10%)、その他(10%)
動く	⑨体を動かしたいのに、動かない。	動く(50%)、動ける(30%)、動かせる (20%)

5. 結論

①行為の結果に焦点を当てる対象の変化と被害や迷惑の意味という場面での誤用が多く見られた。

②「意図性があるかどうか」「主語がものかことか」「前にある助詞はがかにか」で自他動詞を使い分ける学習者が多かった。

③「色-変わる」、「事故-起こる/起きる」のように言葉をコロケーションで覚えていることがわかった。

④今回の調査の対象は日本滞在の経験がある学習者であった。自他動詞を使う際に、日常の大量なインプットにより語感で使い分ける場合が多いこともわかった。

参考文献

小林典子(1996)「相対自動詞による結果・状態の表現—日本語学習者の習得状況」『文藝言語研究・言語篇』29, pp. 41-56. 筑波大学文芸・言語学系

杉村 泰(2013a)「中国語話者における日本語の有対動詞の自動詞・他動詞・受身の選択について—一人為的事態の場合—」『日本語／日本語教育研究』4, 日本語／日本語教育研究会

杉村 泰(2013)「中国語話者における日本語の有対動詞の自動詞・他動詞・受身の選択について：動作主の不注意による対象の変化を表す場合」『ことばの科学』26, 153-170,